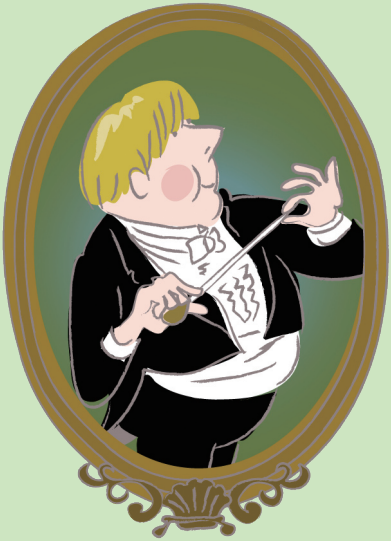
指揮棒のおはなし

～ How To Conduct Music ～

Vol. 3



PICKBOY
NAKANO CO., LTD.

Chapter 4

川本貢司が語る

“私と指揮棒”の歴史

演奏会を組み立てるには、理性と情熱が半々

僕が指揮を始めた高校生の頃、たまたま行った楽器屋さんに木の指揮棒が置いてあって、握っただけで指揮者になったような気分になって悦に入っていたのですが（笑）、そのときのしっくりした感覚がいまだに捨てきれなくて木の指揮棒を使い続けているということもあります。木製なので、どうしても折れてしまうことがありますが、指揮をしている上で「こういう動きはしたくない」と思っているようなことをしてしまったときに、後ろにあるバーにぶつかったり、譜面台にぶつかって折れてしまうんです。そういうときは、苦楽を共にしてきた戦友を失ったような気分で落ち込みます。

譜面台も含めて自分の周りの空間は把握しておかないといけないのに、それを無視して、もしくは忘れて動いているときは、理性を失っているわけです。演奏会を組み立てるには理性と情熱 ── 本能と言い換えてもいいですが、それが半々だと思っています。なのに本能だけが先走っているときには何も見えていない。そういうときに限って、「バキッ」とやってしまう。そのときの演奏会は心のバランスが崩れているわけですから、後で録音を聴いてもろくなものではありません。

指揮棒は音を出しませんが、やはり楽器という意識を持つべき

僕は折れた指揮棒を捨てないで、全部“指揮棒の墓場”と呼んでいる花瓶に挿して取ってあるんです。「自分のせいで折れてしまった」という戒めにもなりますので。そもそも、指揮者は力を入れて振ってもろくな音が出ません。実は昔45㎝という長い指揮棒を使っていた時期があるのですが、力が入りまくっていて「なんで思うように音が出ないんだろう」と悩んでいました。でもふとしたことから持っていた指揮棒を切って短くしてみたら、身体から力が抜けて、良い音が出るようになった。そのときからです。「指揮棒

も楽器」という思いを強めたのは。

指揮棒は音を出しませんが、それを使って音を出してもらう以上はやはり楽器という意識を持つべきだと思います。楽器だと意識しないと、指揮棒を持つということが逆に制約になる場合もあるくらいです。まず５本の指を閉じなければならないし、指揮棒があることで身体の動きも制約されるわけですから。それがわかった上で、でもやはり指揮棒は必要なんですね。指揮棒が手の動きの延長であり、自分の手の動きを助けてくれるものだというということ理解していれば、そこに音が付いてきます。結果的に、指揮棒も音を出していますよね。だから「指揮棒は楽器」なのです。

指揮棒のおはなし

演奏しやすい楽器を選ぶように指揮棒も選ぶべき

―― 川本貢司

指揮棒によって意思が伝わりやすい、伝わりにくいの違いは、自分にとって持ちやすいかどうかだと思います。持ちやすくて動かしやすい指揮棒は意思が伝わりやすいですから、そういう指揮棒を自分で探すべきだと思います。みんな楽器を選ぶときには、自分にとって演奏しやすい楽器を選ぶじゃないですか。指揮棒もそういうふうに選ぶべきです。なのに指揮棒だけ適当なものを選んで、適当に指揮してしまう。でもそうじゃない。「指揮棒は楽器だ」と思うだけで、意識が変わると思います。

最初は PICKBOY のカタログを見ながら重さを検討して候補を選んだのですが、指揮者生活 25 年にして、やっと手に馴染む指揮棒に出会えたと思います。ここに至るまでの道のりは長かったですね。それがメープル製でホワイトにペイントされた長さ 320 ㎜のシャフトとエボニー製のグリップを持つ、FT-150EB/W です。振った時に私の手の動きを最も的確に表現してくれるような長さに多少自分で調整していますが、握りに重みのあるエボニーグリップのおかげで良好なバランスは変わらないということがわかりました。

［profile］ 川本貢司（かわもと・こうじ）

島根県生まれ。チェコ、スロヴァキアを拠点に、ドイツ、東欧を中心とするヨーロッパで活躍する指揮者。2008年よりチェコ・ピルゼン放送交響楽団音楽監督在任。2007年5月「プラハの春」国際音楽コンクール指揮部門に第3位入賞。1995年東京芸術大学音楽学部指揮科を卒業。指揮法を若杉弘、遠藤雅古、小田野宏之、グスタフ・マイヤー、フランシス・トラヴィスの各氏に師事。1994年には第10回東京国際音楽コンクール指揮部門において第3位を受賞。

これまでイスタンブール国立交響楽団、スロヴァキア放送交響楽団、スペイン・マラガ交響楽団、スロヴェニア国立マリボル歌劇場管弦楽団、プラハ放送交響楽団、ザクセン・ランデスビューネン管弦楽団、ボフスラフ・マルティヌー・フィルハーモニー管弦楽団、北チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団などを指揮。オペラ指揮者としては、2001年に北ドイツ・フォアポマーン歌劇場で欧州デビューを飾る。以後6年間、フォアポマーン歌劇場第一専属指揮者ならびに、北東ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者を兼任した。

●ホームページ　http://www.kojikawamoto.com